

フランス語を教えるということ

中村 隆之

Mon enseignement du français

NAKAMURA Takayuki

語学教育研究所の創立40周年の折にエッセイを寄稿する機会を与えられた私は現在、別の大学で教えている。大東文化大学では外国語学部英語学科に所属するフランス語教員として、2013年度から2017年度までの計5年間、講師として在職した。

在職期間、私は2015年度から16年度までの2年間、語学教育研究所の研究員として活動し、各年度の最初の研究会で、当時従事していた科研の研究課題「20世紀フランス語圏カリブ海文芸誌の調査研究」に関する報告をおこなった。同研究所の当時の所長は日本語学科の田口悦男先生だった。研究会と会議をかねた集いのあとには、毎回、所員には弁当が準備された。その弁当は、他の機会に配給されるものと比べて格段に美味しかったことから、語研には潤沢な予算があるのだと思い込んだものだったが、それが所長の所員へのありがたいねざら이었다ことをのちに知った。それが伝統なのか一代限りなのかはわからないが、よく印象に残っている。

本題に入ろう。今回のエッセイは「フランス語を教えるということ」と題することにした。現在も語学教員である私にとって、外国語を教える際にしばしば思い起こすのが、大東大時代のことである。なお、媒体の関係上、この文章を読んでもくれるのは大東大の元同僚だと思われるが、私は同時にこの文章の宛先として、フランス語教員は当然のこと語学教員一般も念頭に置いている。

1. 大東文化大学のフランス語

外国語学部のフランス語の当時のスタッフは、私が在籍していた頃と基本的には変わらない。お名前をあげると、高尾謙史、白井春人、姫田麻利子、フランソワ・ルーセルの各先生である。私の離職に合わせて野澤督先生が新しいスタッフに加わった。

この5名が中心となって運営される外国語学部の授業は、学生の視点はともかく、とても贅沢であると思う。

なぜ贅沢なのか。それは主に二つの面と言える。

一つ目は制度面であり、端的にフランス語のスタッフが外国語学部を集結していることである。従来は、現在の勤務先がそうであるように、語学教員は学部ごとに点在していた。外国語学部英語学科内にヨーロッパ二言語コース（英独コース）が設置される以前は、現在の先生方は主に文学部所属だったようだ。この新コース設置の際に他学部に残る先生もいたのは残念だったが、現在のように外国語学部のなかでドイツ語とともにフランス語の存在感を示す制度を築けたのは非常に重要なことである。

一般論として大学改革と語学教育の観点から付言すれば、旧教養部門の全般的解体後、多くの大学では語学教員のポストは削減対象となり、学部外に新たに設置された語学教養部門のセンターにポスト数を減らされた上で集約されていったとおおまかには言える。つまり英語学科ヨーロッパ二言語コースは、このような潮流に飲み込まれなかった成功例だと私は考えている。

外国語学部英語学科のなかに大東大のフランス語とドイツ語の教員が集まることで、学生たちは第二外国語を集中的に学ぶ機会を持てるようになった。週2回は日本語による間接教育が実施され、週1回はネイティブ教員が担当するという学習環境として充実したカリキュラムである。さらに、この学びの機会を二次の数週間の語学研修プログラムや留学プログラムに繋げるという制度設計ができたことは、後述するように、語学教育の土台として盤石である。

いま一つは、外国語学部を集結するフランス語スタッフが、フランス語教育学会の基幹メンバーを中心に構成されている点である。いまは昔のことだが、私が院生・ポスドク時代を過ごした2000年代には明らかに存在したのが、フランス文学の研究者がもつ自分たちの研究分野にたいする一種独特の矜持であった。この矜持は美しく見えるときもあったが、多くの場合、同じ業界内での暗黙の区別として働いた。都内での院生・ポスドクにとっては東大本郷仏文科を中心とする不可視のヒエラルキーが存在した。こうしたエリート主義的心性のなかでは所属する大学院による差別は当然のこと、文学以外の分野のフランス研究者はややもすると下に見られていたし、私自身、居心地の悪い思いを何度もした。なお、私の研究者としての自己形成とその立場についてはここでは書かない。ご関心のある方は『植民地文化研究』20巻（2021年）に比較文学研究者の西成彦先生によるインタビュー「植民地文化研究の最前線に触れる（第2回）」をお読みいただきたい。

ともかく時代は移り変わった。フランス文学研究者の多くは、やはりポストの削減された各大学の「フランス文学科」（実際の名称は多様であるためここではカッコに入れている）よりも、むしろ語学教員として、大学に常勤・非常勤を問わず所属して

いる。「フランス文学科」の教員も、初年次の語学教育に携わるケースのほうが多いのではないだろうか。つまり教育の点では、フランス研究者とは、語学を教える教員のことである。

この意味で大東大のフランス語教員の多くが、語学教育を研究の対象にしていることは実は贅沢である。私が思い出すのは、東松山の研究棟の同じ階に研究室をもつ白井先生、姫田先生、ルーセル先生との密な連携である。役割分担をある程度明確にしながら、大東大の学生にどのようなフランス語教育をおこなうのか、という基本的な問題意識と熱心な取り組みがチームとして存在した。学生数がそれほど多くないこともあり、一人ひとりに対する注意を向けることができ、授業の進捗状況も定期的に確認していた。

たいへん初歩的なことだが、語学教育の方法の大部分を規定するのは教科書であることを身をもって学んだのも大東大での経験が大きい（それ以前も高校や大学で教えた経験はあったが、あまり自覚していなかった）。おそらくいまでもそうだが、FLEのA1とA2をしっかりと身につけさせることを基本とし、FLE用のフランス語輸入教材を教科書に用いていた。生きたフランス語の基礎を身につけるという方針のもと、語学教育のやり方を絶えず見直す姿勢で取り組む同僚たちから、私は多くを学んだ。

2. 単位取得としての語学の位置付け

私たち語学教員にとって、言うまでもなく大事なことは、学生の語学力を伸ばすことである。この点では大東文化大学外国語学部での語学教育は、フランス語にかぎらず、多くの教員がもっとも力を注ぐ教育の基幹に相当するだろう。よく伸びる学生もいれば、ほとんど伸びない学生もいる。語学教員はスポーツのコーチに似ている。語学教員の本領が発揮されるのは伸び悩む学生を伸ばすことにあるだろう。

この点は職場が変わったいまでも、一番思い悩むところである。私の職場である早稲田大学法学部が毎年迎えるのは、多くの場合、受験勉強を得意とした部類の学生である。しかも他学部より総じて学習意識が高いため、語学の授業はおこないやすい。しかし、極端に言えば、これは程度の差の問題であり、法学部で伸び悩む学生の場合、もっとも多いのは、語学の学習を単位取得の手段として、ほぼ最初から割り切ってしまうという態度である。

この場合、学生は語学には必要最低限の力しか割かない。もちろん、単位を認定できる水準に達していればそれで良いのだから、学生の側は当然のこと、教員の側からしても特段問題はない。しかし、私に言わせれば、その学生の先は見通せる。いわゆるラク単狙いで卒業するという展望である。

この考え方はきわめて効率的で合理的である。これにしたがえば、語学は技術習得である。しかし、技術として語学を勉強するのはきわめて効率が悪く、多大な努力を

払うにはその労力は見合わない。実際、全国的に見ても、外国語教育に特化した少数の国立大や私立大の上位層をのぞけば、大学における第二外国語の習得は、技術としては基礎が身につくという程度ではないだろうか。そうであれば、もっと別のことに時間を注ぐというのは理に適っていると言えるだろう。

これがいま私が抱えている語学教育をめぐる課題である。このことを解決するのに必要なのは、各人の動機の向上である。私が相対的にうまくいっていると感じるのは、教師と学生間よりも、学生同士に緊密な関係性が生まれ、語学クラスが積極的に機能する場合である。こういう場合、クラスが居心地の良さと結びつき、学習効果も底上げされるように思う。だが、これはどうしても偶然性に左右されてしまう。男女の比率、個々の学生の傾向、教師との相性など、複合的な要因が働くために教員の意思だけでどうにかなる問題ではない。

それゆえ、こうした動機を底上げするための一番安定的な方法が、制度面の整備である。法学部は、他学部比べて語学教育に力を入れており、法律科目の教員からもその重要性を理解してもらえている点で、大東大のヨーロッパ二言語コース同様、一年次には週2回は日本語ネイティブ教員の文法を中心とした授業、週1回はフランス語ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の授業を提供している。こうした語学教育は二年次までは集中的に継続するが、三年次以降は法律科目に集中的に取り組む関係で、それ以降、語学教育で学んだことが一般的に反映されにくくなる。つまり専門と語学との連携にはいまだ改善の余地がある。

さらに現状では早大の法学部の語学教育に欠けているのは、留学と語学研修プログラムである。これらは留学センター案件として分離独立しており、有効な連携が少なくともも築かれていない。この部分がカリキュラムに組み込まれる場合、フランス語に対する動機はおのずと高まるだろう。

3. 技術としての語学を越えて

このようにフランス語教育ひとつをとってみても、大東大の外国語学部英語学科と早大の法学部ではカリキュラムや教員構成が大きく異なることがお分かりかと思う。

ただ、その基層の部分は同じである。それは、繰り返しになるが、学生の語学力を伸ばすことだ。そして、語学力の向上は、いわゆる学力以前に、学習者のやる気にかかっている。私の経験がはっきり示すように、語学を習得すべき技術として位置付けるだけでは、語学学習の動機としては弱いのである。

ではどうすればよいのか。そこで私がしばしば思い起こすのが、大東大での経験である。フランス語をチームで教える際にその構えとして私が学んだのは、学生にフランス語を学んでいることを自分自身の大切な経験にいかに変えるか、ということだった。姫田先生はこれをフランス語のアイデンティティと呼んでいたように思う。この

アイデンティティは、実際にフランス語が日常的に使用される現地に行くことでおのずと培われるものだ。たとえそうした経験がなくても、フランス語の学習経験を自分のなかに肯定的なものとして捉えることができるとき、学習は大学卒業後も継続していくだろう。

このことを私なりに言い換えると、技術としての語学を学ぶ前に、学生が思想としての語学を知ることが必要なのではないか、ということだ。思想としての語学とは、なぜ語学を学ぶのか、を原理的に知ることである。

合理的思考をする学生がよく理解するとおり、語学ほど不効率な学習はない。生成AIの飛躍的進展によって、単純な読み書きや作文の水準では、機械が日本語をフランス語に自然な文章に変換してくれる。語学を単なる技術として捉えれば捉えるほど、第二外国語の習得は不要になるだろう。

しかし語学は、人間が生きるうえで実は非常に大きな学びの場を提供してくれる。

第一に、語学は簡単に身につかない。学習者が学ぼうとする言語をあたかも簡単であるかのように宣伝するのは別の次元で、語学が簡単に身につかないことをむしろ強調すべきではないだろうか。なぜなら、この身につけることの困難は、私たちの学習の無限を提示するからである。学ぶことを諦めなければ、私たちは一生外国語に付き合える。

第二に、語学は間違っても、忘れてもよい。私たちは外国語として学ぶ以上、間違っても忘れることも当然のことだから、気にする必要はない。間違ったら訂正すればよいだけの話だ。だから肩の力を抜いて純粋に学べるのが語学である。

第三に、語学とは他者の文化の言葉を学ぶことである。それぞれの言語には各言語特有の文化がある。私たちは、自分たちと他者の違いを外見で判断しがちだが、実はもっと大きな違いは母語とする言語の違いである。他者の母語を学ぶことは、他者の思考法と価値観を学ぶことである。

一番言いたいのは三番目であり、ここが語学を学ぶ根源的にしていわゆる国際的な意味だと私が考えることである。以上のことは多くの語学教員に賛同してもらえと思うが、実際の語学の授業のなかでは伝える機会が案外少ないのではないだろうか。

他者の思考法と価値観を学ぶことは、日本語の環境を相対化する感覚を養うことを意味する。外国語教育は、日本語の同質性のなかでは発想できない他者への興味・関心を生み出す。それだけではない。この第三の視点をとれば、私たちは外国語で読み書き、聞き話すことによって他者の思考を自己のうちに響かせることができる。私たちが他者を経験するのは、翻訳された文化に触れるときよりも、他者の言語環境のなかにおののきながらも勇気をもって入っていくときなのである。